

感染症発生動向調査委員会報告 2月

今月のトピックス

麻しんは2008年1月から全数把握疾患となりました。市内ではすでに300例以上の報告があり、小学校入学前の予防接種(MRワクチン第2期接種)の徹底をお願いします。

インフルエンザは減少傾向。タミフル耐性株による地域内での小流行が見られるも終息。

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84か所、内科定点:55か所、眼科定点:15か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成20年1月21日から平成20年2月24日まで(平成20年第4週から第8週まで。ただし、性感染症については平成20年1月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

<麻しん>

1月から感染症法の5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。

(国立感染症研究所ホームページ)

<http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>

横浜市では、第8週(2/18~24)までの報告数は372例で、全国の報告数2706の約14%と、人口に比して非常に多くなっています。年齢別では10代が過半数を占めています。また、約半数が予防接種未接種でした。2012年麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。小学校入学前の期については、3月末の接種期限が迫っています。

横浜市の詳細については、「麻しん(はしか)の流行について(4)」

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/measles.pdf をご覧ください。

《麻しんの排除に向けて》

2008年1月から、風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握。

2006年度より、麻しん単独ワクチンの1回接種から、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種に変更。

2008年4月より5年間、中1及び高3相当の年齢への定期接種を実施。

<レジオネラ症>

横浜市では、昨年は28例と、前年の4倍の報告がありました。今年は、1月に3例、2月に1例の報告があります。全国では、昨年は665例、今年は第8週までの累計が119例となっています。

循環式浴槽やジャグジーを持つ温泉施設などをよく利用している異型肺炎患者の場合には、レジオネラ症の検索が重要と考えられます。

なお、衛生研究所と区福祉保健センターでは、原因究明と感染拡大の防止を目的に喀痰検査や施設調査、遺伝子検査を行っています。

その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

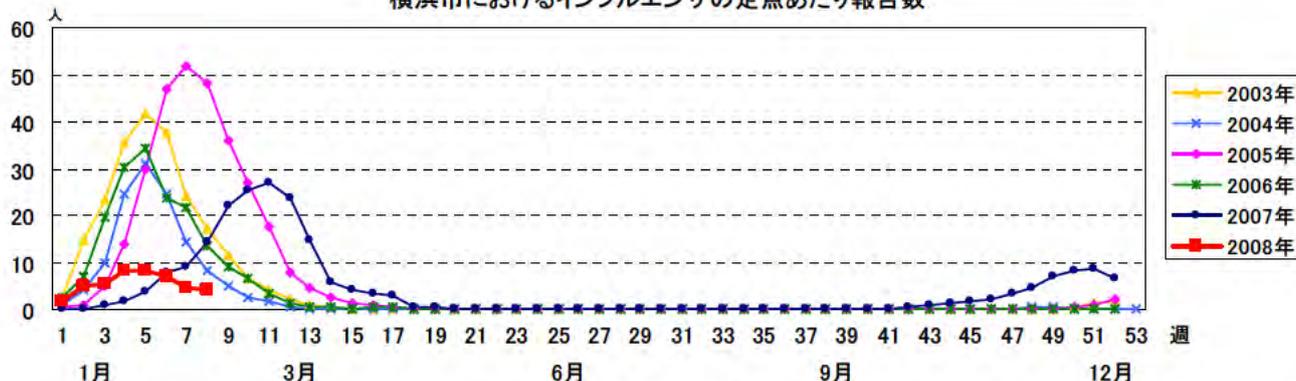
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu

定点把握の対象

<インフルエンザ>

年末年始にかけて減少し、第2週以降は再び増加しましたが、第5週をピークに第8週は定点あたり3.92と減少傾向になってきました。区別では、注意報レベルの「10」を超えている区はなく、都筑(9.0)、磯子(9.0)、港北(8.2)で多くなっています。川崎市は5.58、神奈川県(横浜、川崎を除く)は5.46と、どちらも横浜市より高い値でした。

横浜市におけるインフルエンザの定点あたり報告数



全国的には、ここ数年間は大きな流行が見られなかったAソ連型(AH1)が多く検出されています。横浜市の検査結果では、当初は今シーズンから使用されているワクチンと類似株でしたが、抗原変異したウイルス株が増加しつつあります。また、2008年に入ってから、A香港型(AH3)、B型もわずかですが、検出されています。

最新の情報については、http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/sokuhou.pdf をご覧ください。

第5週の検体から、タミフル耐性インフルエンザウイルス(Aソ連型)が分離されました。同一区内であったため、小地域における一時的な流行があったと考えられましたが、その後は認められず、流行は終息しました。詳細は http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/tamiflu-r.pdf をご覧ください。

<感染性胃腸炎>

年末にかけて多く報告されましたが、1月以降は横ばいが続いています。第8週は、定点あたり10.88と、増加しました。川崎市は17.13、神奈川県(横浜、川崎を除く)は12.36とどちらも横浜より高くなっていますし、今後の動向にはまだ少し注意が必要です。

病院、施設、学校等におけるノロウイルス感染の集団発生もあるため、職員の健康管理についても、十分注意を払う必要があります。

<RSウイルス感染症>

例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。今シーズンは、インフルエンザの流行がかなり早く始まりましたが、RSウイルス感染症は、例年通り12月に多く報告されました。1月に入ってから報告が続き、第5週に11人と増えていますが、第3週以降は減少傾向で、第8週の報告は1人でした。

病原体定点から採取された検体からは、衛生研究所で、12月に10例、1月に5例、2月に8例が、PCR法で確認されました。うち、12月の1例と1月の2例、2月の5例はAソ連型(AH1)インフルエンザとの重複感染、2月の1例はA香港型(AH3)インフルエンザとの重複感染でした。

<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

第2週以降増加傾向が続き、第8週は定点あたり1.97と、昨年、一昨年に次いで高い値になっています。瀬谷(9.0)、磯子(5.5)、青葉(3.7)、都筑(3.3)で発生が目立ちます。昨年、一昨年とも、2月～3月にかけて高い値が続きました。川崎市は2.81、神奈川県(横浜、川崎を除く)は2.92と、どちらも横浜より高くなっていますので、今後の動向に注意が必要です。

< 流行性角結膜炎 >

港北、泉で増加しており、成人例が目立ちました。感染力が強く、患者の眼脂やウイルスに汚染された手指、タオル、器具などに接触して感染するため、注意が必要です。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

性器ヘルペスウイルス感染症の1月の報告では、男性の2割、女性の3割が、60歳以上となっており、再発例が報告されている可能性もあります。また、女性の淋菌感染症が3例ありました。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ(内科)定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹(病院)定点：3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2008年2月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点41件(鼻咽頭ぬぐい液)、内科定点13件(鼻咽頭ぬぐい液)、基幹定点4件(髄液)、眼科定点は1件(眼脂)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎36人、発熱のみ3人、けいれん1人、発疹1人、内科定点は気道炎7人、関節・筋肉痛4人、発熱のみ2人、基幹定点は無菌性髄膜炎1人、ウイルス性感染症1人、けいれん重積2人、眼科定点は角結膜炎1人でした。

3月10日現在、小児科定点の気道炎患者19人、発熱のみの患者2人、けいれん患者1人からインフルエンザウイルスAH1型、気道炎患者2人、発熱のみの患者1人からインフルエンザウイルスAH3型、気道炎患者1人からインフルエンザウイルスB型、気道炎患者1人からアデノウイルスが分離されています。また、内科定点の気道炎患者4人、関節・筋肉痛の患者1人、発熱のみの患者2人からインフルエンザウイルスAH1型、気道炎患者1人からインフルエンザウイルスB型が分離されています。

これ以外に、PCR検査では、小児科定点の気道炎患者4人、内科定点の気道炎患者2人と発熱のみの患者2人からRSウイルス、小児科定点の発疹患者1人から麻疹ウイルスの遺伝子が検出されています。RSウイルスの遺伝子が検出された患者8人のうち、小児科定点の気道炎患者3人、内科定点の気道炎患者1人と発熱のみの患者2人はインフルエンザウイルスAH1型、小児科定点の気道炎患者1名はインフルエンザウイルスAH3型が分離陽性でした。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

2月の感染性胃腸炎関係の受付は13菌株で起因菌は検出されませんでした。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は7件でA群溶血性レンサ球菌が7件から検出されました。髄膜炎から *Haemophilus influenzae* B型が、1件分離同定されました。